

# 冬期の保育衛生 (其の一)

廣瀬興

冬期、幼稚園託児所の缺席の多い原因は、感冒、氣管支カタルの如き呼吸器病であらう。一般的にも、冬期に於ける呼吸器病は、夏期に於ける下痢腸炎と共に、我國乳幼児死亡の最大原因である。幼稚園に於ては、園児を感冒や氣管支カタルより豫防し、萬一、罹病しても輕度に經過する様、家庭と共力し、且つ、他の園児への傳染を警戒せねばならぬ。それには、家庭は勿論、幼稚園に於ても類似の疾病の初期の病症をよく識つて善處することが肝要である。呼吸病其他冬期に多い疾病と云へば、單純の感冒、扁桃腺炎、咽喉カタル(マンギナ)、流行性感冒(インフルエンザ)、流行性扁桃腺炎(おたふく風)、氣管支カタル、肺炎、結核性氣管支カタル、百日咳、猩紅熱、デフテリア、麻疹等であるが、何れも、熱症狀(體溫上昇、不機嫌、頭痛、全身違和等を云ふ)咳嗽の二つを初發徵候として、發病する

ものであるから、この二つに注意して、早期に、診斷を確實にし、適當の手當を爲し、他の園児に傳染を豫防し、且つその患兒を重症に陥らしめぬ様にしたいものである。その意味に於て、本項は熱と咳嗽に就いて少しく委しく述べることとするが、熱とは單に、體溫の上昇のみならず、全身的違和の症狀を云ふのであるから、従つて、脈搏、呼吸とは離るべからざる關係にあり、併せてこの兩者をも講ずる所以である。

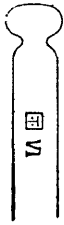
## 熱

凡て、健全な人體は他の溫血動物の如く、外界の溫度の高低に拘らず、常に一定の體溫を保持してゐる。

然れども、若しその機能を失ふときは、體溫其常度を違ふ。是れ體内に何れか病變の存する徵候であつて、殊に

その固有温の上昇するを熱と稱するのであるが、熱とは單に體温の上昇のみを謂ふに非ず、物質代謝の亢進により、或は一定器官の機能障碍によつて發する所の諸症候をも併稱するのである。故に、熱性病に於ては、固有體温上昇の他に、全身の病感、體力弛緩、頭痛等の腦症狀、其他脈搏及呼吸數の増進、食思缺乏、煩渴引飲、消化不良等を招來するのである。

**檢温法** 體温計は我國に於ては獨逸の如く、攝氏(C)檢温器であるが、英米は、華氏(F)、佛は列(R)氏を用ゆることが多い。體温計には一分計、十分計、又、平型棒狀のもの等あり、何れでもよいが、正確に檢定されたものでなければならぬことは勿論、檢定済でも餘り年月を経てゐると、狂つてゐるものがある。求めるとき、檢定の年號を一應檢して買ふがよい。それは體温計の裏面の硝子の表面に藥液で腐蝕その檢定の年號を、アラビヤ文字で示してある。VIは



昭和六年



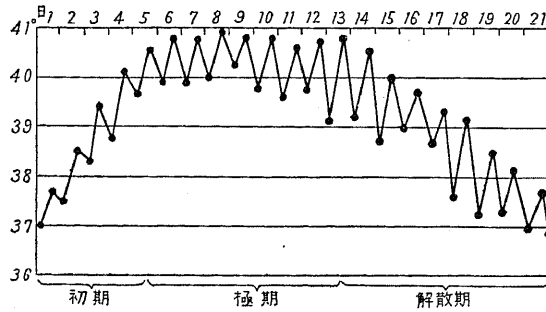
から、今一度、測定してもらふことがよい。又家庭に求めた後も一年に二度位は時々、醫師又は檢定所で對照してもらふ必要がある。體温計の不正確のため、種々の問題を起こす例がある。

**檢温の部位**は通常腋窩であるが乳兒は肛門にて測定することがある。前者より約 $0.2$ 乃至 $0.5$ 度高い。又、舌下に挿入して測ることがあるが腋窩と殆んど同じである。檢温の度數は只一回の場合もあるが眞に病症を檢するには少くとも一日中二回午前七時より九時の間及午後四時より六時の間に於て行ふ、猶正確なのはその他に午後十一時半午後七時の四圍とすることである。

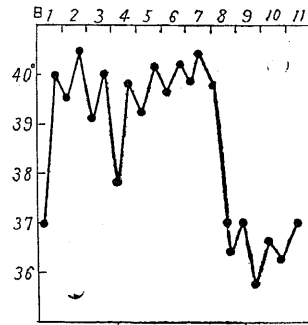
**平常體温**は腋窩に於て平均攝氏三十七度であるが、一日中定時を刻して變動し其上界を三七・五度、下界を三六・二五度し、その間、約 $1.2$ ・五度の日差あり、と云はれてゐる。その原因は不明である。又體温は、男女性には關係がないが、年齢に由つて多少の差異がある。三七度以上ありて全身的違和のあるときは熱ありと見做すべきである。熱の發作するときは通常、惡寒を伴ふもので、發熱甚だ急な

るときは多くは戦慄を以て始まる。そして戦慄のとき甚しく全身冷感を覚え、咬牙震顫を發し皮膚蒼白となり且つ脈

を大體區別して三種とする即ち(イ)稽留性熱型(ロ)弛張性熱型(ハ)間歇性熱型である。



第一圖



第二圖

(イ)稽留性熱型とは日差一度以上を越へず、多くは最高熱のまゝ、數日間稽留するものを云つて、腸チブス、クループ性肺炎、の二疾患の特徴である。第一圖は合併症なき正規の輕症腸チブスに於ける熱曲線で、初期は階段狀に昇進し、數日を経て其極度に達し、一週乃至二週間其度に稽留し(極期)

冷するも、其終りになれば皮膚灼熱するを常とする、而して熱が急に下降すると多くは發汗を來すのであ

次で漸次下降(解散期)し普通に復せるものなり。第二圖は、クループ性肺炎の熱曲線にて惡寒戰慄を以て體溫俄に昇騰し(故に初期は僅かに數時間に過ぎず)高度の稽留熱を呈し、數日の後、一時偽分利し再び上昇し更に數日後、眞に分利して、平溫に復するものである。熱型に由つて他の感冒其他の熱性病とよく鑑別することが出来る。又腸チブスの場合には高熱にも拘らず、脈搏數の少さが特徴である。(未完)

る。  
熱型、臨牀上熱の經過に特有の型を示すものあり、それ